

灯舷

今、どこの企業も人材確保に必死になっている。筆者が大学の現役時代にお世話になった造船の世界でも同様のようだ。当時、筆者の研究室は、幸い、造船企業との共同研究が多く、研究室を巣立った学生の9割が、造船、海運、船級等の海事産業に飛び込んでくれて今も活躍している。

しかし、その後、大学と造船業界との共同研究は減り、今では卒業・修了生の定員のわずか10%余りしか海事産業には行かなくなったという。危機感をもった後輩教授陣からの依頼で、企業との共同研究のコーディネーター役を引き

受けるようになったのが3年前。3人の教授の研究テーマを

にらんで、企業向けの共同研究テーマを

まとめて、プロジェクトを立ち上げて参加企業を募ると8社が応募してくれた。学生たちは、同プロジェクトの中の船舶に関する研究テーマを卒業研究や修士論文に選んでくれて、熱心に研究に取り組んで大きな成果を挙げた。年3回の共同研究報告会では、学生がプレゼンをして、その後には必ず懇親会もつけた。

造船企業との共同研究

最近の若い人は誘っても飲み会には来ないという風説とは違っ

て、共同研究に参加した学生たちは喜んで懇親会にも参加してくれ、現役で活躍する先輩技術者との交流を楽しんでくれた。そのかいもあってか、3年た

仕事にする若者も増える。当たり前だが当然の結果が得られた。これを如何に持続させるかが課題で、日々、頭を捻っている。

企業の研究開発とは異なり、大学の研究はやや遠い将来の目標に目を向けなくてはならない。いわば広い畑にいろいろな種をまき、育てて、タイミ

のあった時に果実を社会に還元するというプロセスが大事となる。筆者が研究の世界に入った頃は、船の造波抵抗理論や波浪中運動理論が確立し、有限要素法やCFDなどの理論解析手法が盛んに開発されていて、今は、環境対応技術や自動操船、AIの応用などが花

盛りだ。次にどのような船が現われ、そのための技術とはなんなのか。夢は膨らむ。

(池田 良穂)